03/7/8

1200026　土岐真美子

1 章　メディアとしてのインターネット

メディアとしてのインターネットを考えるとき、
「コミュニケーションを広げるメディア」と「情報を残すメディア」の二つの側面を考える必要がある。

「コミュニケーションを広げるメディア」の側面

　コンピュータを利用して、「見知らぬ人と」「顔を見合わせずに」コミュニケーションをとるという場面がある。これは主に電子メールでの場合である。コンピュータを利用したコミュニケーションの研究（Computer Mediated Communication:CMC）では、コンピュータを利用したコミュニケーションと一般の対面場面におけるコミュニケーションの違いに着目して、比較実験を行った。

　その結果、コンピュータを利用した対話場面において、普通の対面場面ではあまりみられない、フレーミングという「コミュニケーションのなかで現れるののしり、侮辱、強調された表現」が観察された。

　しかし、このフレーミングは頻繁に現れるものではなく、メーリングリストなど、フレーミングを許すグループ規範が成立している場面において、その文脈にしたがって参加者がフレーミングを起こすということが明らかにされた。

　このことが、人とのつながりにもたらす影響として以下のことが挙げられる。

- 電子メディアを利用することによって、現実のコミュニティの中の人同士のつながりが弱くなるということ。
- 電子メディアの利用は人と人の関係を活性化するという観点。

　どちらがいいとは一概には言えないが、電子メディアの発達により新たなコミュニケーションの形が形成されたことは明らかである。

「データベースとしてのインターネット」の側面

　1990 年代になってインターネットが一般の人にまで広がったのは、Web という情報伝達の媒体の仕組みができたことと、もう一つはコンピュータのハードウエアの能力が向上したためである。そのことによって、入出力の多様化や巨大な記憶スペースの確保など、メディアとの関わりがコンピュータを経由してできるようになった。
これらのことが、私たちにもたらしたものとして以下のことが挙げられる。

- 論文に必要なことや、ほしい商品のことなど、私たちが得たい情報を、ホームページで検索などをすることによって得ることができる。
- 公的なことだけではなく、ごく普通の個人的な情報（日記であったり、趣味のことな

ど）を表現し、公開できる。

以上、２つの側面を考えるとインターネットは、以前は遠い存在であった“世界”というものが近い存在に変えた衝撃的なメディアといえるのではないだろうか。